

学生の幼児体育指導に向かう心理からみた保育者養成の在り方について

～体力低下時代の学生に合わせた実技授業の考察～

About Childcare Person Training from the Viewpoint of Psychology toward Infant Physical Education
～Consideration of Practical Skill Classes Corresponded to Students in the Age of Physical Weakness～

赤堀 達也*

Tatsuya AKAHORI

要 旨

平成 20 年頃に体力テストが最も低下した時代の小学 5 年生・中学 2 年生たちが保育者養成校に入学し、保育者となって現場に出る時期を迎え始めている。やっとなんか徐々に改善の兆しが見えはじめた子どもの体力問題が再発してしまう懸念がある。そのためこの研究では、体力低下時代の学生たちに合わせた保育者養成を行うための考察をすることを目的とした。結果は運動やスポーツに対して苦手意識を持っている学生が多く、幼児体育指導を行いたくない心理との割合が等しいことがわかった。各種目の運動やスポーツにおいての苦手意識と嫌悪感を見てみると、跳び箱・鉄棒・走系といった幼児体育で行われるような種目やバスケットボールにおいて苦手意識及び嫌悪感を抱いていた。また学生の運動歴を見てみると、高校時代からダンス系を行う学生が急増する。高校時代は中学までの部活動の選択とは異なり、自分の意志で行うか行わないかを定めることができる。ダンス系の運動は学生たちの運動やスポーツに対する興味を高めることができると考えられる。ダンスやニュースポーツを取り入れた授業を展開していく必要があることが示唆された。

key words : 幼児体育、保育者養成、授業展開、苦手意識、運動嫌悪感

はじめに

小学 5 年生及び中学 2 年生の体力低下は次のように推移している。昭和 39 年から行われていた旧体力テストと平成 11 年から行われている新体力テストの結果から見ると、子どもの体力の推移は、文部科学省が発表した「子どもの体力の現状と将来への影響」¹⁾では「調査開始以降昭和 50 年ごろにかけては、向上傾向が顕著であるが、昭和 50 年ごろから昭和 60 年ごろまでは停滞傾向にあり、昭和 60 年ごろから現在まで 15 年以上にわたり低下傾向が続いている。」と記されており、昭和 60 年頃が子どもの体力テストの結果が最高を示して以降、その後は著しく低下し、平成 20

年頃に最低の結果となっていることがわかる。その後、スポーツ庁「平成 30 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について」²⁾によると「平成 20 年度の調査開始以降における推移と比較してみると、小学校 5 年生の男子は横ばい、中学校 2 年生の男子は若干の向上傾向、女子はいずれも向上傾向。なお、中学校 2 年生男子及び小学校 5 年生と中学校 2 年生の女子は平成 20 年度の本調査開始以降で最高値」と記されている。平成 20 年度以降は改善されてきてはいるものの、昭和 60 年頃の水準には届いていない現実である。

このような子どもたちの体力低下の推移がある中で、平成 20 年頃の体力低下が最も著しい頃の子ども

*旭川大学短期大学部

たちが保育者養成校に入学・卒業するようになり、保育現場に出るようになり始める時期が到来している。

スポーツ庁「平成 20 年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」³⁾ を見てみると「運動時間による体力差は明らかになった。なお、女子において、運動をほとんどしない児童が多数いることがわかった。」となっている。そのためこの頃の運動が苦手だった子どもたちは運動頻度の感覚が異なる可能性が高い。

一年間週一回、幼稚園の朝の自由遊びの時間に立ち会っていたことがあるが、子どもたちはジャングルジムで遊んでいるようで上で話をしているだけだったり、ブランコで遊んでいるように見えて漕がずにおしゃべりしているだけだったりすることが多く、体を使った運動遊びをしている子どもは、運動が得意な保育者と一緒に遊んでいる子どもは一部でしかなかった。やはり保育者の子どもと関わりが、子どもの運動量を大きく左右する。

前橋明は、子どもたちの健康を導くために食事・睡眠・運動遊びが大切であり、それらは密接につながっている。どこかが崩れると全てが崩れてしまう。逆にどこかが良くなると全てが良くなるという「一点突破・全面改善」⁴⁾ を説いている。例えば親が子どもの健康を考えて、睡眠を早くさせるよう一点突破を試みても、運動習慣の感覚が異なる体力低下時代を過ごした保育者のもとでは、親の努力を無駄にしてしまうだけでなく、保育者によって悪循環に引き込んでしまうことになりかねない。

そのようなことにならないようにするためにも学生たちの幼児体育指導に対する意識調査及び運動に対する意識調査を行い、体力低下の著しい時代を過ごしてきた学生に合わせた保育者養成を行うために、体育及び幼児体育といった実技授業の展開について考察をすることとした。

研究方法

横浜市の保育者養成校である 3 年制の A 専門学校に通学し、かつ B 短期大学を併修し、保育士免許と幼稚園教諭第 2 種免許状の両方を取得する 2018 年に卒業

した学生 195 人（男子 48 人・女子 147 人）を対象に、保育所実習及び幼稚園実習を終えた段階でアンケートを実施した。そのアンケートの質問内容は以下の 5 項目である。

- ①園に就職した際、幼児への体育指導を希望するか
- ②運動やスポーツ全般への苦手意識について
- ③運動やスポーツの各種目別の苦手意識について
- ④③の各種目別の好き嫌い（運動嫌悪感）について
- ⑤幼児・小学生・中学生・高校生時代の運動歴

①の幼児体育指導を希望するかどうかについては、「是非やりたい」「どちらかと言えばやりたくない」「どちらかと言えばやりたくない」「絶対やりたくない」の 4 つの選択肢を用意した。

②の運動やスポーツ全般への苦手意識については、「とても得意」「どちらかと言うと得意」「どちらかと言うと苦手」「とても苦手」の 4 つの選択肢を用意した。

また①と②の比率の差の検定を χ^2 乗検定で行い、割合を比較した。

③の各種目別の苦手意識について、競技はマット・鉄棒・走系・跳び箱・縄跳び・水泳・サッカー・野球・テニス・バスケットボール・バレーボール・バドミントンを取り上げ、「とても得意」「どちらかと言うと得意」「どちらかと言うと苦手」「とても苦手」の 4 つの選択肢を用意した。マット・鉄棒・走系・跳び箱・縄跳び・水泳は幼児を対象とした運動やスポーツの代表的なものとして、サッカー・野球・テニス・バスケットボール・バレーボール・バドミントンは学生の体育でよく行われる運動やスポーツの代表的なものとして取り上げることにした。

④の各種目別の好き嫌い（運動嫌悪感）について、競技は③と同じ競技を取り上げ、「好き」「どちらかと言うと好き」「どちらかと言うと嫌い」「とても嫌い」の 4 つの選択肢を用意した。

⑤の運動歴については、園時代・小学校時代・中学校時代・高校時代の各時期における運動歴について答えるようにした。

調査結果

1. 卒業後の幼児体育指導の希望と運動の苦手意識との相関関係

①園に就職後に幼児体育の指導をしたいか、という問いの回答を表1にまとめた。回答が得られたもののうち48.6%が「どちらかと言えばやりたくない」「絶対

やりたくない」のいずれかの解答をしていた。女子だけに絞ってみると58.2%であった。

②運動やスポーツ全般的に「とても苦手」・「苦手」と答えた学生は回答が得られたもののうち44.4%であった。女子だけに絞ってみると49.3%であった。詳細は表2の通りである。

表1 園に就職後、幼児体育の指導を行いたいかな

	是非やりたい	どちらかと言えばやりたい	どちらかと言えばやりたくない	絶対やりたくない
全体 (n=146)	13.7% (n=20)	37.7% (n=55)	44.5% (n=65)	4.1% (n=6)
男 (n=36)	22.2% (n=8)	58.3% (n=21)	19.4% (n=7)	0% (n=0)
女 (n=110)	10.9% (n=12)	30.9% (n=34)	52.7% (n=58)	5.5% (n=6)

表2 運動やスポーツに対する苦手意識

	とても得意	どちらかと言うと得意	どちらかと言うと苦手	とても苦手
全体 (n=189)	10.6% (n=20)	45.0% (n=85)	33.3% (n=63)	11.1% (n=21)
男子 (n=47)	12.8% (n=6)	57.4% (n=27)	25.5% (n=12)	4.3% (n=2)
女子 (n=142)	9.9% (n=14)	40.8% (n=58)	35.9% (n=51)	13.4% (n=19)

「①園に就職後に幼児体育の指導をしたいか」で「是非やりたい」「どちらかと言えばやりたい」と答えたグループを「やりたい群」とし、「どちらかと言えばやりたくない」「絶対やりたくない」と答えたグループを「やりたくない群」とした。また「②運動が苦手な生徒」で「とても得意」「どちらかと言うと得意」を「得意群」とし、「どちらかと言うと苦手」「とても苦手」を「苦手群」とした。そして園に就職後に幼児体育指導をしたいかと、運動が苦手な生徒についてその比率の差の検定を χ^2 二乗検定で行ったところ、p値は全体0.45、男子0.28、女子0.16といずれも $p > 0.05$ になり、幼児体育の指導をしたくない心理と運動が苦手な意識を抱えている割合の比率は等しい結果となった。

よって、卒業・就職し、実際に保育の現場に携わるようになったとき、女子学生は運動が苦手という理由

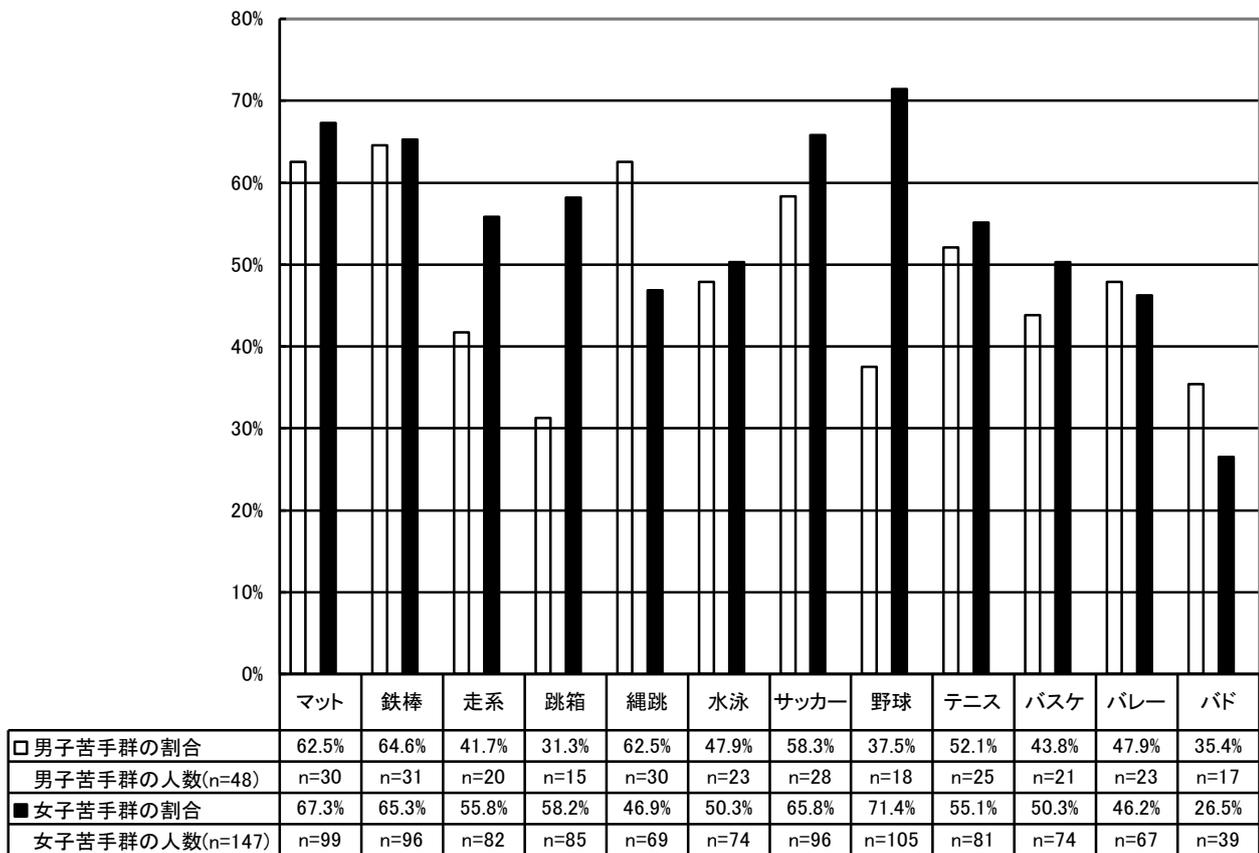
で、幼児体育の指導を行いたくない学生が多いとわかった。

2. 幼児体育指導を行いたくない心理と種目別の得意苦手、好き嫌いとの割合や人数について

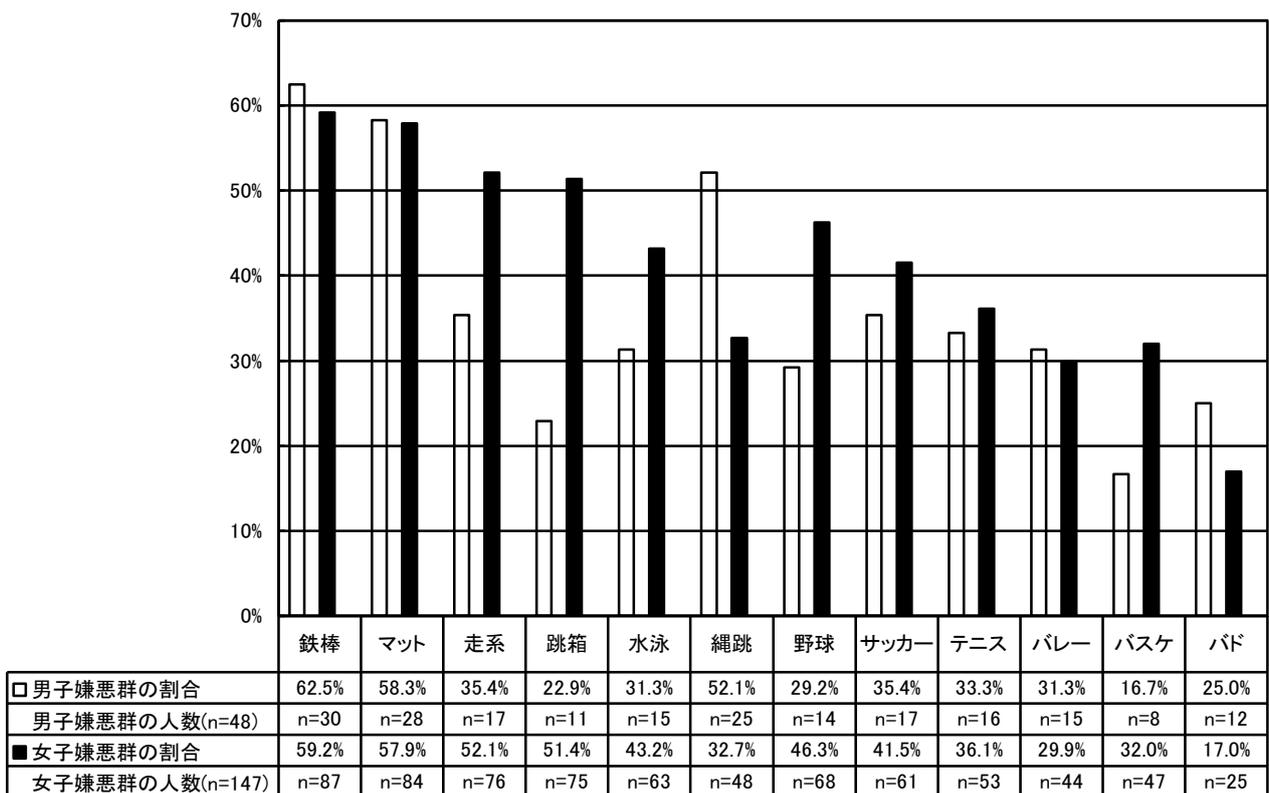
③④種目別の得意苦手に関する回答に対して「どちらかと言うと苦手」「とても苦手」を「苦手群」として括ったその割合と人数をグラフ1にまとめた。

また、好き嫌いに関する回答に対して「どちらかと言うと嫌い」「とても嫌い」を「嫌悪群」として括ったその割合と人数をグラフ2にまとめた。

どちらにおいても男子のみの集計と、女子のみの集計を行った。



グラフ1 幼児体育指導を行いたくない心理と種目別の苦手群の割合と人数



グラフ2 幼児体育指導を行いたくない心理と競技別の嫌悪群の割合と人数

苦手意識においては、バドミントン・バレーボール以外は、男女または女子のみで半数以上が苦手意識を持っていた。嫌悪感については、その種目に嫌悪感を抱いている割合は苦手意識に比べて低いことが分かった。特に球技においては嫌悪感を抱いている割合は低かった。しかし女子を見てみると幼児体育系の種目である鉄棒・マット・走系・跳箱で半数を超える人数が嫌悪感を抱いていた。

これらの結果より、幼児体育系の種目である跳び箱・鉄棒については苦手意識や嫌悪感を抱く割合も高いことがわかった。

3. 運動歴について

⑤運動歴について、似たような運動やスポーツについてはまとめるようにし、表3のように分類して集計を行った。各時代のそれぞれ上位5つを並べた表が、表4である。

表3 運動やスポーツの分類

記載	内容
「水泳」(マリンスポーツと区別)	水泳・プール
「バスケ」	ミニバス・バスケットボール
「テニス」	ソフトテニス・硬式テニス
「野球」	野球・ソフトボール
「サッカー」	サッカー・フットサル
「体操」(器械体操)	体操・マット・トランポリン
「ダンス」(リズムに合わせて動くもの)	ダンス・チアリーダー・エアロビ・新体操・バレエ・バトントワリング
「陸上」(陸上競技全般)	陸上・100m・マラソン・リレー・駅伝・高跳び
「ウィンタースポーツ」	スノーボード・スケート・アイスホッケー
「マリンスポーツ」	サーフィン・ボディボード
「ニュースポーツ」	タグラグビー・Tボール・ゲートボール・キンボール・パターゴルフ・ドッジボール

表4 幼児・小学生・中学生・高校生の年代での運動歴

	性別	1位	2位	3位	4位	5位
幼児	男子	水泳(n=7)	武道・野球(n=2)		サッカー・体操・ダンス(n=1)	
	女子	水泳(n=16)	ダンス(n=7)	体操(n=5)	サッカー・テニス(n=2)	
小学生	男子	野球(n=12)	水泳(n=10)	武道(n=7)	サッカー(n=6)	バスケ(n=4)
	女子	バスケ(n=26)	水泳(n=25)	バドミントン(n=20)	ダンス(n=15)	武道・テニス・ニュースポーツ(n=8)
中学生	男子	バスケ(n=10)	陸上(n=9)	野球(n=8)	テニス(n=5)	武道・サッカー・水泳・卓球(n=3)
	女子	バドミントン(n=21)	テニス・バスケ(n=17)		バレー(n=11)	陸上(n=10)
高校生	男子	バドミントン・テニス・バスケ・野球(n=3)				陸上・武道・サッカー・水泳(n=2)
	女子	ダンス(n=19)	バスケ(n=11)	バドミントン(n=9)	テニス(n=5)	陸上・武道・バレー(n=4)

運動歴においては、幼児・小学生では水泳が多かった。しかし中学生以降で続けている学生は少なかった。小学生以上ではバスケットボール・バドミントンが多かった。

ダンスにおいては中学生でランク外になるものの、高校生では再度ランクインし、しかも最多となった。

考察

アンケートの集計結果により、保育者養成校の学生は、約半数が運動やスポーツに苦手意識を持っており、そして就職後の幼児体育指導を行いたくない割合と関係していることがわかった。そのため、保育者養成校における体育実技や幼児体育の授業では、運動をできるようにするために同じ動作を繰り返すような授業展開ではなく、運動に対する苦手意識を取り除くような楽しいと思えるような実技授業の展開が求められる。

1. 体育実技における球技系の種目選択について

各球技別に分析すると、いずれの競技においても、苦手意識よりも嫌悪感を持っている割合が低かった。つまり、取り組み方次第では苦手意識を払拭できそうであることがわかった。そのため、取り上げる競技を選択するといいと考えられる。球技と球技以外の種目で比較してみると、球技の方が苦手意識を持っていても嫌悪感を持っている割合が少ない。そのため、球技を多く取り入れるといい。その中でもバドミントンは苦手意識を持っている学生の割合も少なく、嫌悪感を持っている割合も少ない。そのためバドミントンを多く取り入れるといい。

野球やサッカーは、共にプロリーグがあり、日本で最も人気のあるスポーツであるが、保育者養成校の生徒は苦手意識を持っている割合が高く、嫌悪感を持っている割合も他の種目に比べて高かった。そのため、女子が多い保育者養成校では不向きである。

ゴール型の競技を行う場合は、サッカーよりもバスケットボールの方が苦手意識においても嫌悪感においても向いていることがわかった。またバレーボールも苦手意識はあるが嫌悪感を持っている割合が低い競技であった。バレーボールも保育者養成校の学生には向いていることがわかった。

ただし、いずれの競技も苦手意識を持っている学生の割合が多い。そのため通常通りの競技スポーツを行うのではなく、工夫したり、ニュースポーツで代用したりするといいと推測できる。特にニュースポーツは経験がなく、初めて行う場合が多い。苦手意識の先入観がなく、また嫌悪感も持っていない。そのため保育者養成校の学生にはニュースポーツを取り入れると良いと推測できる。バスケットボールにおいては、小学生用のバスケットボールでゴールを低くしたミニバス、ポートボール、新しく東京オリンピックで採用されることになった3 by 3などがある。またバレーボールにおいては、ソフトバレーボール、インディアカなどがある。このような工夫をして行うことが求められる。

2. 幼児体育系の実技授業について

鉄棒・マット・跳び箱・走系は苦手意識も嫌悪感も共に高い割合だった。これらの種目は幼児体育の代名詞とも言える種目であるため、これらの種目の苦手意識や嫌悪感が改善されない限り、幼児体育指導を行

いたいという心理につながってこないことがわかった。鉄棒・マット・跳び箱は危険と隣り合わせであり、またできる・できないがはっきりと出てしまう種目でもある。そのため、学生においても大型遊具を使用するなどしてアスレチックのような要素を出し、これまでの器械体操的な授業展開を変えていく必要があると考えられる。

水泳や縄跳びは苦手意識も嫌悪感も、比較的割合が少なかった。水泳は行いにくいかもしれないが、縄跳びについては積極的に取り入れていくといいことがわかった。

3. 運動歴から見てみると

運動歴から見てみると、高校時代からダンス系の部活動を行う学生が一気に多くなり一番人気となる。高校では、部活動は自らの意志で入部を決めることができる。そのため、学生の本当にやりたいことを強く反映していると考えられる。このことから、高校から急浮上したダンス系は、保育者養成校の学生にとって強く興味を持ちやすい分野であると考えられる。TVや動画等でダンスグループが活躍していることもあり、また平成20年に告知された中学校学習指導要領保健体育⁵⁾でダンスが必修化され全員が行っていることから、ダンスやリズム体操を体育実技や幼児体育に取り込むといいと考えられる。

そのため、体育実技の授業でダンス発表会を行ってみることにした。完全コピーしたダンスを披露することにしたところ、観客の学生から手拍子が起き、盛り上がった発表会となった。幼児体育の授業においては、縄跳びと音楽を融合し、リズム縄跳びとして授業で行った。曲及び振り付けを自分たちで考え発表会を行ったところ、実に

多様な動きを取り込んで創作し、どちらの発表会でも観客の学生から自然と手拍子が起きるほど盛り上がったものとなった。特に保育者養成校の学生にとっては、前に出て発表する機会は、今後教員になるものとして大事で、そのような場に慣れさせるためにも有効である。

最後に・謝辞

体力低下時代の子どもたちが保育者養成校に入り卒業して現場に出ていく時代が来た。これまでのような体育を行っている、卒業後の保育に支障が出てしまい、現場の子どもたちの体力や体を動かす意識に影響が出てしまう。例え、運動に対する苦手意識や嫌悪感があった学生が入学してきても、運動を得意にはできないだろうが、せめて運動に対して肯定感を持って現場に出るようにしていくことが保育者養成校には求められる。そしてそのような授業展開が求められる。

今回の集計で、幼児体育を取り入れている園は219園中196園と、89.5%であった。しかし、担任だけで幼児体育を行っている園は16園しかなく、8.2%に過ぎなかった。それ以外の園は、担任も一緒に入ることもあるが、外部指導者を招いて行っている。そのため担任が運動の見本を見せる機会は少ない。担任の役割としては日常の保育で、戸外に連れ出したり運動遊びを促したりして、一緒に遊んだり遊ぶ機会を増やしていくことの方が求められる。そして間接的に幼児体育をサポートしていく立ち位置となることが大切である。そのため保育者自身の運動ができる・できないといった運動能力的な要素よりも、運動が好き・嫌いの感

情的な要素の方が、子どもに運動機会を多く与えることができるようになるため、子どもへの影響が強い。運動に対して嫌悪感を持っている学生を、肯定感に変えていく実技授業がこれからの時代に求められることがわかった。

お忙しい中、アンケートにご協力いただいた神奈川県横浜市にある A 専門学校で B 短期大学の併修をしている学生、教職員及び関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

1) 文部科学省 : 『子どもの体力の現状と将来への影響』

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344530.htm 2019.9.15 閲覧

2) スポーツ庁 : 『平成 30 年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果について』、pp1～29、2018.

3) スポーツ庁 : 『平成 20 年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果』、pp39～48、2009.

4) 前橋明 : 『日本幼児体育学会第 15 回大会講演要旨・研究発表抄録集』、pp18～28、2019.

5) 文部科学省 : 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』、pp1～13、2008.